

佐藤一斎著、川上正光全訳注「言志四録(三)」講談社学術文庫 1980年5月10日刊を読む

## 創業と守成

### 〔訳文〕

1. 創業(国を創めてその基を建てること)と、守成(先君の後を守って失わないこと)とは、一般的に国を開くということと、世を継いで行くことをいうのである。その実際を見て行くと、創業の中に守成があり、守成の中に創業があるのである。ただよく守成する者が、よく創業する。ただよく創業するものが、よく守成するのである。
2. 殷の湯王が夏の桀王を破って、商という王朝を建て、夏のもとの禹王の旧領域を継いだが、その制度文物は旧を守り、また、周の武王が商の政治に反対して立ちながら、制度などは旧に由った如きは、創業といっても内容は守成である。
3. これらとは反対に、周の成王は、二代目であるが、文物制度を改革し、また三代目の康王は畢公に命じて、洛邑を治めしめた道にも、盛衰があったが、結局は民俗に従って政道を革めた如きは、守成中の創業といってもよい。
4. 要するに、気運には常と変とがあるので、人と物は之に従うものであることを知るべきである。

### 〔語義〕

- (1) 創業は国を建て事業を起こすことで、孟子に始めて見る。
- (2) 守成は先代の業を継いで守って行くことで、史記に出ず。
- (3) 貞観政要に、「唐の太宗、侍臣に問う。創業と守成といずれが難き」との問答が最も有名である。

P156 ~ 157

### 〔コメント〕

貞観政要の「創業と守成」を参照した佐藤一斎の言志四録のことば。身にしみる。

- 2009年8月31日林明夫記 -